八田知紀の「白雲日記」（解説・翻刻）

藤田福夫

本稿は八田知紀の歌をふくむ紀行文「白雲日記」（シラクモノニッキとノを入れて読む模様。跋文による。）を翻字したものである。同書は明治二年春、名古屋の東壁堂（永楽屋）から刊行された。明治二年の刊記は無いが、尾張住で知紀の弟子であった羽鳥春隆の跋文に「明治二巳のとしの春」とあるので二年の刊行が知られる。

上巻、下巻共和装の小本（縦一八・三センチ、横一一・八センチ）で上が二十二丁、下が二十丁である。さくらの花房の押し模様を散らした白い表紙（裏表紙共）で上巻のみ、表紙の見返しの枠内に「八田大人紀行、白雲日記、名古屋東壁堂蔵板」と三行に記されている。上巻の序文はあつ子（門下の税所（さいしょ）敦子と察せられる）下巻の跋文は「尾張国なる羽鳥春隆」である。上下共、一面十行で細字の美しい版本でその筆者は下巻の終りに酔雨書とあるので酔雨という人物であったことが知られる。また上巻に熱田、宮の渡場（吹雨源春隆筆）下巻に山かげに遠望した富士（探風斎守保筆）の絵が加えられている。春隆は即ち跋文の羽鳥春隆と同人物であろう。

本書は明治三十六年七月、富山房から活字化して出版されているが、今日では容易に見がたいので、原本出版の東壁堂（永楽屋）との地縁や内容が東海道の旅中心であることを考えて、ここに改めて翻字することにした。原文に濁

点は施されていないのでその侭に従った。漢字は新字体に、異体仮名は通行のものに改めた。

知紀については「校註国歌大系・明治初期諸家集」の解題とか、「近代文学研究叢書」（昭和女子大学、光葉会発行）第一巻の諸記事をはじめ「現代短歌全集」（改造社発行）第一巻の年譜などに詳しいのでここに再説しない。要点のみを抄記すると知紀は寛政十一年（一七九九）薩摩国西田村に生まれ、二十七歳の時はじめて京都にあった薩摩藩の蔵役人となり、やがて香川景樹の門に入り、桂園の上席弟子となった。安政二年には家集「しのぶ草」を刊行、明治初年の第四編に至った。明治元年十月、新政府の皇学所御用係となり上京、明治六年（一八七三）九月一日東京で死去した。七十五歳であった。東京、芝の大円寺に葬られたが、現在は杉並和泉町の大円寺に移されているという。彼の歌は特に傑出したものは無いが、桂園の伝統の中で流暢な調べを重んじ、旅を好んだ性向もあって叙景に優れている。「近代文学研究叢書」第一巻の著作年表によれば「高千穂の山苞」「坊之津紀行」などに始まり、紀行、歌書、学問論、随筆など六十余種が見られる。明治中後期の「しがらみ草紙」「心の花」「歌文」「わか竹」などの諸雑誌に知紀に触れたものが多いことはその影響力が長く続いていたことを示すものである。

この紀行は慶応戊辰四年六月五日、藩侯島津忠義が東下しようとした後を追って同日に京都を出発するに始まる。忠義は西郷の意見で帰館したが、知紀は旅を続け、出水に騒ぐ大津から、鈴鹿を越える。伊勢石薬師では佐佐木弘綱の訪問を受け、桑名からは七里の渡しを渡って宮（熱田）に至り、同所の太田美観の家に泊り、本書の跋文を記した羽鳥春隆とか、名古屋の河邨内養などに会った。矢矧の橋はこわれたままなので舟で川を渡り、十九日金谷でこの旅の大きい目的であった富士山を始めて見た。宇津の山を越え、清見寺に詣で、沼津、三島などは駕籠の中の夢ごこちに過ぎた。箱根の本陣では数日前の降雪を聞き「いまや、空はれて海こしにみるいたゝきのかのこまたらになりて更にいふへきこともなくうつつならぬこゝち」であった。往年の日本人の富士に対する気持を示すものであろう。二十

八日品川に着き知紀のみ一足先に江戸田町の大坂屋に入った。本文にあるように井上文雄ら江戸の知人と交わり詩歌を交換し、隅田川に舟遊し、梅若塚などの名所を訪ねたりした。七月十七日横浜に行き、ここでは東北に出陣途中の同郷の黒田清綱（後の御歌所所長）に会った。同地の病院で膝の痛みがあるので米人医師スイドルの診察を受けなどした。様々に時代の空気の投影された叙述である。七月二十八日イギリス人より借入れられていた蒸気船アルビヲン号に乗った。紀州沖では強風に逢って八月二日神戸に入港した。神戸から大阪までは外国から購入して間も無い軍艦に乗り、大阪では今橋のほとりの平野屋に泊ったが、その宿へ故人で歌で知られた熊谷直好の妻が訪ねて来た。神戸の宿で長崎の判府事大隈某（重信）と親しく話したのも時代をよく示している。大阪からは増水した淀川を舟でさかのぼり、伏見に着き、洛南竹田の原で

なきわたる初かりかねを身にしめて竹田の原にけふはきにけり

など三首を詠んだところで日記の叙述は終っている。

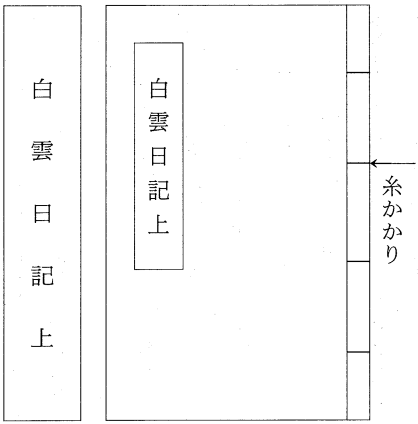
知紀の京都出発の六月は鳥羽伏見の戦（一月）や西郷、勝の江戸無血開城交渉（三月）のあとであり、帰洛の直後八月二十七日が明治天皇の即位式、続く九月八日が明治と改元された日である。近代日本の誕生の世状を間接的ながら反映したこの日記の意義は、富士を見たことよりむしろ、この点に存すると言えよう。東海道東下の旅そのものが可能であったくらいであるから混乱時とは言え、江戸での雅遊の余裕もあったのであろうが、そこに政界、軍事に直接関与しなかった知紀の文人的心境も働いていると見られる。江戸の井上文雄の所ではその膝下に居た松の門三艸（みさ）子に会い「かねてきゝ及ひしみさ子も出来てたさく（注、短冊）とも書たるかなかに

我ふねはうき木ならねと角田川月のみやこにこくかとそ思ふ」

という歌を記録している。二十歳に達せず未亡人となったこの薄倖の女性歌人の消息、心境をよく伝えているが、こ

の日記には時代の混乱と距離を置いた世界の空気が漂っている。さらに「十一日赤坂なる勝某（勝安芳）を訪ふ……みちのうへにつきてかねて消息せしこともありけれはいたくよろこひてよろつねもころなり……」などにも、知紀の心の余裕、時代の一面が見られるのである。明治維新の陰にかくれた側面を期せずして本書は伝えているものであろう。往路見得なかった所々を帰りの旅にたずねたいと記しているが、帰路は海路によったためたずね得なかったのは残念であったろうが、蒸気船に乗ったので、却って新時代を味わい得た点も注目したい。

故熊谷武至氏は早くその著「続歌集解題余談」（昭一八・一〇私家版）に本書の解題（本文一部引用）を書かれ、また椙山女学園大学文学部に非常勤講師として出講された最後の年、昭和五十八年度には本書を演習用テキストとされたが、これはご発病のため一回切りで中絶してしまった。同氏の本書への関心を示すものであるから付記しておく。



八田大人紀行

白雲日記

名古屋東壁堂蔵板

八田大人ひさしくみやこの任にそなはりたまひ、みちのほまれはた世にならひきこゆるひとなきものから、またあつまちのふしのたかねを見たまはぬなむいとほいなくおほゆるなと、ひとひと御前ちかくてかたりあへりしをきこしめして、そはくちをしきわざにもあるかな、としもやうやうおいぬとはいへと、なほいとすくよかなれは、とくゆきてみよかし、みちのほともめつらかならむことおほからむを、まちみんはたたのしかるへうとのたまはせて、やかて御いとまたまはりしかは、かしこみきこえて、とみにいてたちたまひしより、いつしかとひをかぞへまちきこゆるほとに、あきのなかはちかうなりてかへりのほりつつ、くさぐさのつとにそへてたてまつりたまへるひとまき、かたはしうかかひみるにもめもあやにいのちのぶるここちするは、かのやまにありてふいくくすりもとめ得たまへるしるしの、まつはあらはれたりともいひつへくや

あつ子（注、税所敦子）

白雲日記　上

古稀とかいふよはひかさねあけたれと猶はる〳〵とわか君のちよやちよにもあはゝやとねかふこゝろのせちなるまゝになにかしの山にいく薬もとめむとてあつまのたひには出たちけるなりさるはいにし月のはしめころよりおもひたちしをさみたれいみしうふりつゝきて川々のつかえ(ママ)はさらなりあふみの海のありさまからさきのまつせたのはしなと波こえしとて世におそろしくいひさわくめれはしひても出かたくたゆたひつゝあるほとに友達のもとより歌よみておくりたるあまたあり

渡　忠秋

雲たにもいゆきはゝかる不二のねの高き願は君そしるらん

かへし

しらくものはゝかる山にのほりてもしなぬ薬は得なんとそおもふ

これのみは人にゆつらぬみちなれはわれ先こえん千代の遠山

税　所　あつ子

たかき名を空にきゝつゝ不二のねの神もや君を待わたるらん

みな月のてる日にちかき不二のねも雪やふるらん見む人のため

たひ衣たつときくより敷しまのやまと錦のつとをこそまて

かへし

大空のむなしき名こそたかゝらめ神のおもはんことそやさしき
みな月の空にもつもる白雪を君とともにも見むよしもかな
さくや姫めくみたまはゝ敷しまのやまと錦を山つとにせむ

末永景賢

高千穂のやまよりいてゝ時鳥ふしの高根になきわたるなり

かへし

たかちほの山ほとゝきす不二のねに及はぬ音をも鳴んとそおもふ

新藤盛章

不二の根の雪見かてらにゆく君は千年をもふるしるしなるらん

かへし

時しらぬ雪にならひて不二のねの高き願をかさねあけてん

河瀬格誠

ことのはの高きしらへに不二のねもくらへくるしと打なけくらん
たくひなきふしの高根のいたゝきも君か願のふもとなるらむ

かへし

ことのはのちりもつもりて不二のねの雪にかゝやく世にもあはゝや

田尻種賢

不二の根にありといふなる薬もて身をしたもたはいく千代かへん

返し

ふしのねにのほりもあへす活くすり得たるに似たり君かことのは　上ノ二

龍岡資成

大そらのふしの高ねをこゝろあてにたつらん翅おもひこそやれ

かへし

おもひやる心もやかてあしたつの翅にのりてあまかけるらむ

ひと日国分友俊かたひやとりにつとひてわかれをしみけるついてに

福嵜季連

ふしのねの雪をたのみてみな月の空ともいはひ君は行らむ

原田豊秋

時鳥なくねきゝつゝ庵原の清見かさきもあすかゆくらん

渡忠秋

わかれゆく君をおもへは五月雨のはるゝ空さへさひしかりけり

友俊

さみたれの雲も晴なむ不二の根を君かかとての上に見るかな

さてあすたゝんとての日御うちの君の御まへにめされてかしこくもたまものさへありけれは

いく薬ほかにはあらしと不二のねの上にあふかむ君かたまもの

身をまもる君か玉ものあふくにも末たのもしきみちの空かな

とよみておもと人まてきこえおきぬしかるに東のあたともいまたくたりはてす日々に蜂起するよしきこゆれは国のかみ達をさしむけ給ふこと、なりて我君もやかてあまたの兵を率て六月五日の朝みやこのみたちを出立たまへれはおのれもこのみあとをしたひてものせんにはしかしとおもひなりておなし日の辰時はかり家をいてたちぬ三条大はしにか、りけるとき

千代の坂こえむかとてに見るもよしあはたの山の松のむら立

日のをかにて

うくひすの老こゑきけはおいか身の世に長居することもはつかし

はしり井にしはしいこふ

年老ておくれかちなる我こまをいさめかほなる走井の水

ゆき〳〵て午時はかり大津のうまやにつきぬ君には朝とく御参内ありてみけしきうか、ひたまふほと江戸より西郷なにかしとみにのほりきて大総督の宮よりみかとへきこえ上給ふむねありけれは我君はひとまつさつまにくたり給ひふた、ひ大挙してのほりたまふへきよしみことのりありてやかてみたちにかへりましぬとつけきたれり人々こはいかにとおとろきまとひいたくちからおとして見えけれと兵隊は猶のこりなくさしむけたまふへきよしなりけれはさらにいさみす、みてゆくなりけりおのれはつゆあつからぬことなから島津なにかしの本営にあひやとりしてありけれはけふのさわきのいみしきさまをまのあたり見き、つ、よはひと夜目もあはすなりにけり

六日朝とく人々とともに立ちてふねにのる日ころの水いまたなかはもひきやらす大津の町ゆきかひたえなきさちかき家ともはおほく水にひたりて壁ともくつれおちたるさまなと見るもうるさしこの水つねのなきさに立かへらんは秋のはしめころにもなりぬへしとて里人ともわひあへり千々にあまれる人々の船にのるとてあらそひさわくありさまい

はむかたなくこはむかしにも立まさるへきいきほひなるにいさなはれて老のこゝろもふりおこさるゝやうなり巳の半ころやはせにつきぬこのわたりもいまた水につかれる家のみにてつねのみなとには舟よせかたく川しりめきたるところよりおりて田中のほそみちをつたひてひるはかり草津の駅につきぬやとりは大かた本陣なり名物のうはか餅をくふさはかりの人々にのこりなくくはせてやるさまめさましきまてなり

名にたかき草津のうまやうまやとてもちひあかぬはひとりたになし

といへるをきゝてわかき人々むかて山のうたをいふに

立むかふむかてもかもなむかて山我つはものゝわさこゝろみん

これをきゝてけにや秀郷にもほこるへきはこのときなりとてわらふこのやまをみかみ山ともいふかゝみ山もこれなりといふもあれとそはこれよりやゝ北にあたりてみゆるにてかゝみの宿のかたなるへし

をりにあへはいさ立よらんかゝみ山きみかちとせのかけやみゆると

七日よへよりあめふり出て猶やます梅木といふところにて

春ならはうくひすのぬふかさをたにからましものを梅木の里

よこた川れいの洪水に堤くつれて田地のあれたるさまなと見るもうるさし

うらむへきかきりならすやよこ田川よこしまなりし水の心は

午のときはかり石部の宿につく

八日てけよし夏見といふところにれいの名物心ふとといふものをうるその家おもしろく水はしらせていとすゝしきさまにかまへたれは人々汗しのきかてら立よりつゝ云ふ

よしのなるなつみの川の清きせにおりたつはかり涼しかりけり

「上ノ五

水口を過けるほと河へのみちいと涼し

あらし吹松の尾川の土橋は夏のわたらぬところなりけり

土山につきたるはいとはやしおのれ廿とせあまりのむかしなりけむこのあたりまてものせしことありさるは先帝の御代はしめれいの大嘗祭の抜穂使に吉田殿ものし給へりそのをりしも我宰相のきみ江戸よりみやこにのほりたまふ」上ノ六ときにあたりておなしうまやにてゆきあひ給ふへき日わりになりぬれはうち〳〵かの御内なる鈴鹿なにかしに相はかるへきことありてなりけりそのたひはよるひるわかすいそくみちにてところのさまも四方のなかめもこゝろにしるしあへす過けれはこたひははしめてのやうにていとめつらしくおほゆさてこのたひの宿わりをいとまちかくさためられしはをのことも小銃かたけなからはる〳〵ゆくくるしみをふかくいたはり給ふ故なれは人々のよろこひはさらなり老か身の幸ひ又こよなくなむ

九日けふはことにはやく出立てすゝか山をこゆ山のこなたに田村明神のやしろあり外ならぬたひなれはをのことも

ふしをかみつゝゆく

この神のみいつあふきてひんかしのあたことむくるみいくさのとも

峠にせきのあとありてちかころ新関をすゑられたり亀山よりまもるなりとて

あらためてすゑたるせきはふりしよの道をはやかてまもる也けり

ゆくてにねふの花おほく咲たり

道のへにねふるねふの木おきよ〳〵ねて過すへき時ならめやは

ゆく末はいかになるとも鈴鹿山ふりすてられぬ世にこそ有けれ

おとにのみきゝわたりつるすゝか川ふりはへきてもみつるけふ哉

「上ノ七

市野瀬といふところに筆すて山ありこの山さはかりのけしきもなきをなにかしか筆すてたりしはいかにそやなといふもあれといとあやしう雲にそひえて木立岩根のたゝすまひなとさすかによのつねならねは

ことはにも我はうつさんかたそなき昔の人の筆すての山

すへてこのあたりいはゆる米家の山水めきていとさかしきみねともの立つらなりたる又めつらし

みやことはさまかはりたる山なれと猶さるかたにゆく心哉

こよひかめ山の宿にてきけはちかころ脱走人共五百人はかりあつまりて小田原城を襲ひけるに江戸より官軍をさし向られて追討ありけれはこと〳〵く伊豆の大島さしてにけさりしとそかたるをりからなれはゆく〳〵心つかひたえすなむ

十日庄野の駅を過けるに能褒野なる白鳥陵を遙拝す

はるかにもたちし昔のしら鳥の羽風あやしく身にそしみける

石薬師の宿なる佐々木弘綱は井上文雄かをしへ子にてはやくその名きこゆれは人つかはしてありやなしやをとはせけるにはやくこなたにみえ来てねもころにいふ近ころあらはしゝ書なとたつさへきてみせけれは（上の八）

神風にしらへあはせんことのはの高きふしこそきかまほしけれ

といへはかへし

ゆくりなくいせの浜荻とはれても一ふしもなき身をいかにせん

といちはやくものしけり山の辺の御井のあとこのさとにありときけといまは露たにのこらすかれはてたりとそ

山のへのみ井のまし水いまはたゝもとのこゝろをくむ外はなし

赤人の古跡もありときけとおほつかなしまことはあふみの国なる麻生村にそあるへきやゝゆきて杖つきといふ所の茶

店にいこへるほと

杖をのみたのみてきつる中宿にめくりあひたる夕立の雨

日ころのてりつゝきにちりをのみかつき来にけるくるしさ忽このあめにとりかへしたるいとこゝろよし

十一日けふのみちはことに近けれは巳時はかり桑名につく富田にてれいの名物をくふこのあたりより車もてものはこふことを馬牛にかへてものすめりおのれ駕籠にのることをこのまねとあゆみつかれてはのることもあるを此ちまたに車つかふものありてかならすめせ〳〵とせむれはのりてこゝろむ（上ノ九）

きのふは雨けふは車にめくりあひてくるしき道をのかれつる哉

この宿より又舟にのる七里の渡なれは間遠のわたしともいふよしなれとはしめてなれはめつらしきみるめともかるとておもほえす宮の宿につきてきけは申過るころなりけりこの里なる太田美観はをしへ子にてかねてあないしおきつれはやかて出むかへてねもころにものす湯あみなとしてまつあつたの社にまうつきゝしにまさりていといかめしき大宮はしら申すもおろかなり

とこゝろもふりおこされてかしこきは大御つるきの光也けり

吹雨源春隆　花押

熱田の社と宮の海岸　絵

武士のいさをたすけよ世をおもふ心あつたの神ならは神

こよひはかれか家にとまるところからあさらけき魚ともさま〳〵にてうしいて、酒すゝめ子ともに舞なとまはせて

もてなすほとに羽鳥春隆河邨内養なとたつね来みなをしへ子なれは悦ひあへることかきりなし又近隣なる仏師正信といふもの訪ひ来はしめてなれと肴ともたつさへ来てしたしく打ものかたらひおのか像をきさみておくるへしなといふ志あるに似たり

十二日朝とく春隆正信みえ来てさるへきところまておくりせんとて美観もともに出たつ内養は名古屋にかへるなれは町はつれまてものしてわかれつ三人は笠寺まてきてわかれんとするに

ともに来てわかるゝ時は寺の名のかさぬきすつる心ちこそすれ

といへはさらは鳴海まてとて猶したひ来美観か知れる茶店に入てれいの酒くみなとしてわかれけるに

春　隆

かへらんはひと日ふたひとおもへとも遠く別るゝこゝちこそすれ

東路の天の中川半よりこなたへかへれ水のしらなみ

よのなかにふたつなきもの立ならふ時とや不二も君を待らん

かへし　　知　紀

わかれては遠くなるみの浦波のかへり来ん日は久しからめや

しらなみのかへる心しおくれねは天の中川わたるともよし

我も又かしらの雪をかさねつゝよはひくらへん不二の芝山

美　観

あつさゆみおしてとゝむるかひもなくひき別ゆく君にも有哉

雲水のたくひならねと山にそひなかれにそひて君は行らん

返し　　知紀

ひきとむる心しる〳〵あつさゆみおして別るゝみちそわりなき

くも水に心をおける我なれは山になかれにそひてこそゆけ

ゆく〳〵見わたすに田地はさらなり山もいとゆたかにてならひなき国からにそ有ける名所も多くきこゆるをゆく〳〵

おもひやりつゝしとけなくうたへる歌　上ノ十一

さくら田へなきてわたりしあしたつの声ちとせまて聞えけるかな

夕立もいまかふりこむ鳴神のおときゝ山のみねの浮雲

桶はさまちかきあたりにて

ものゝふの心の水も桶はさますきまよりこそこほれはてけれ

こよひ池鯉鮒のとまり蚊の名ところきゝしにまさりていとおそろしきまてなり

このやとの蚊の声しらて松風のおとをつらしとおもひける哉

十三日みかはの国八橋のあとゝいふところゆくての左にみゆれとえゆかすむかしをのみおもひやりて過ぬ

ことのはの匂ひはかりや杜若ちよもへたてぬ情なるらむ

矢矧のはしは二なき大橋なるをいまはくつれたるまゝにてなからはかりのこれり

年へてもはしはつくらて彼岸にわたさぬ罪をつくる也けり

あまたの船してわたせととかくひまいりてわつらはしひるはかり藤川につく

十四日くもり日にていまたをくらきほとに出たつ二むら山は馬手のかたなりとそ

玉くしけ二村山はひとむらの雲にこもりて明んともせす　上ノ十二

吉田のとよ河のはしもれいのこほれたるさま見るもあさましあらぬの宿なる田代なにかしは代々さつまにつかふるなれはけふしもよしたの本営までむかへ来たれりいまのあるしかおやなるものは物めてすと見えてたひ〳〵おのかかたへ消息せしをはやく故人になりぬときくいとくちをしさて鹿児しまよりさしむけられし三隊の兵とも蒸気船にてしまの国の鳥羽のみなとにつきてきのふ桑名をわたりけふあすなんおひつくへきよし告おこせたり

十五日しほみ坂にて

汐見坂しほみえ初つ汐しりの不二の高根も今かみゆらん

ある説に伊勢物語にいへるしほしりは壷塩のことにあらす川尻のことにてなりはといへるはその川しりのしほのさわくおとかの鳴沢のなるおとに似たるをいへる趣にいへりされとひえのやまを廿はかりかさねあけたらむほとしてなりはしほしりのやうになむあるといへるつゝき山のかたちをいへるかことし又川尻をしほしりといはむもいかゝあらんもしみちくる汐ならんにはしほさきとこそいふへけれ又鳴りはといふこと鳴神その外鳴り物の上ならてはうちまかせてはいはれぬやうなりこは猶考ふへき事にこそさてこの山ははやく本野か原といふところより見え初るときゝつれとそは気賀のせきの方にて近ころはとほる人まれなりとそあらぬに来てもこのころの空くもりかちなれはほのかにも見えす

上ノ十三

たはやすくすかた見せぬも中々に心にくしや不二の芝山

高師山はゆく手のひたりにありかの田代なにかしか必このやまにのほりて見給へひかしは遠江灘南は伊勢の海かけてたくひなき眺望に侍りといひしかとえゆかすあかつきはかりゆめさめて

水無月のもなかの月のたかし山松のあらしも夜やをしむ覧

十六日はやく舟にのるけさも猶はれやらす

不二見んとあらぬのせきも越たれと雲のとさしのつらくも有哉

はまなのはしのあとをおもひたとりて

面影も遠津あふみのはまな川中々くちぬ橋の名もうし

うちつけに昔をかけて見つる哉濱名のはしの跡のしらなみ

いまきれの松原こゝにみゆる哉高師の沖にあるゝしらなみ

わたりつきたる所は舞坂の宿なりはま松の宿の北のかたに賀茂の翁のすまれし家ありて今のあるしは翁のうまこにあたれりとそこその春二百年の祭祀に花と寄国祝の題詠をあつめんとてれいのすりものひろめられしに」上ノ十四

きみにより咲こそかへれ石上ふるの山へのやまさくらはな

御国ふりむかしにかへる時はきぬいまこそ見ゆれ君かいさをは

このうたをとおもひつれととかくかきまきれて過にたれはかへさには必ゆきて手向てんとこゝろにちかひおきぬさゝんさの松はやゝひかしのかたなり

たのみけん千世もひと夜の夢にして残るもはかな松風の声

ひくま野は味方の原にて今はれいの調練場となれりといへとさすかにゆかし

旅衣かへらん日にそかさすへきひくまの野への秋はきのはな

十七日天竜川をわたるれいの洪水に堤くつれて常のみちはゆきかひたえぬれは池田の宿のこなたよりひたりのかた田中の道をつたひてゆくなりけり二里はかりのまはりみちなりこの道よりふしのいたゝきかすかにみゆうれしきことかきりなし

うれしさの心まとひか白雲のうきてもみゆる不二の遠山

六丁はかり舟わたしとなりて岸につけはやかてつねのわたし場なり
さてかの堤くつれて俣川となりそこはくの田地つふれたりとかいまもみなきる波おそろしきまてにてこのなかれも五
六丁はかり舟わたしとなりて岸につけはやかてつねのわたし場なり　上ノ十五
不二の根にしたしかるへき名なれとも影たに見えぬ天の中川
見つけの宿に来ても猶見えす
さとの名をたのみてきつるくやしさもいつかは晴ん不二の芝山
こよひは袋井にとまるこゝの本陣大田屋なにかしか家にかもの翁の竹にかゝれる雪を見るかなとよまれし詠草の一軸
をかけたりこは正しきものと見ゆ
十八日日坂のとまりなり片岡屋なにかしか母今はさた過にたれとけしうあらぬかゆくりなくみえ来てくた物なとおく
りねもころにいふわかきほとよりみつからはうたもよみ侍らねと人々の書たるをあつめてたのしみ侍れははたとせは
かりのむかしより御名はきゝ及ひはへりてなとしたはしけにいふかうさわかしきをりからなれはなにこともこゝろに
まかせすかへさにはかならすなといひちきりてわかれぬ言のまゝのやしろを遥拝して
名にしおはゝ国の為にと我願ふことのまゝにも神はうけなん
十九日宿をたちてまちかくあははか嶽をのそむ
うこくへきけしきも今朝はみえぬ哉あははかたけにかゝる白雲　上ノ十六
ほとなく小夜の中山にかゝりて
かへり見る谷のあなたの松のうへに消のこりたる有明の月
この山おもひの外にたかくてなみ木の松かけをゆくほとけしきことなり峠に茶屋おほくありしはしいこふ西行かとし

たけてといひしは世をすてしのちにして飛行自在の身にてすらおもひきやとうたへりましてやおのれはなにとかいはむ

君か代にあふ命たに有ものをけふこそこゆれさやの中山

金谷坂をこゆるほとはしめてかの山さやかに見ゆ

いつしかと心にかけし年月のおもひもはれつ不二の芝山

古今集の甲斐歌にかひかねをさやにも見しかといへるかひかねはいつれの山をさしていへるにかおほつかなしもしはふしのねをさしていへるにはあらしかかひ人の故郷にて見なれしやまなれはうちまかせてかひかねといはんもさるへきことならすやこは猶考ふへきことにこそ菊川にて

いにしへの心をくみて袖ぬらすためしを千世の菊川の水

おほゐ川わたるほといよ〳〵かの峰さやかに見ゆこのわたりうちわたすかきりの山なみみやこに似ていとめてたし

河の名を大井ときけは不二のねもみやこのかとそあやまたれける

しまたの駅よりするかの国なり藤枝にとまる

廿日宇都の山を越ゆこゆ峠を過るほとあなたより修行者ひとりみえ来るものそさなから物かたりのさまにていとも〳〵をかしいてやとの法師もこのころのならひにてとほからす還俗すらんなとわらふもありそはとまれかくまれ

あふ人もともなふ人もうつの山おもへは夢のゆきゝ也けり

あへ川をわたるにこゝの本陣亀屋なにかし川の中洲まてむかへ来てねもころにいひかならすおのか方へといさなひ行たちよりて見れはなみならぬすまひにておやなるものいたくよろこひて名物の餅とも出してもてなすこれもれいの歌

このむにつけてしたしむ也けり安部の市もこのわたりなるへし

老の坂こえける身こそかなしけれあへの市路にあはん子もなし

駿府にとくつきたれはふたりみたりつれにて城郭をめくりて見るに木立なといたくものふりてあれにあれたりすへてこのあたりやまも海もとほからてすみよかるへきところのさまなりうとはまあへのしましつはた山なと猶ゆかしきところともおほくきこゆ久能山はことにふしのなかめよろしときけともえゆかすなりぬ[上ノ十八]

廿一日けふはいたくこゝろいそかれてまつ清見寺にまうつせきの跡はやかてこのあたりなるへし三保のまつはらはるかに見ゆ

不二のねをそかひに見つゝ三ほの浦の沖こく小舟あやにともしも

あまのこに身をかへてともおもふ哉清見かせきのみるめかるとて

江尻にて蚫をくふ

いほ原やおきつのあまかかつき出しあはひのかひそ活薬なる

万葉集にいはき山とよめるはいまのさつた峠なりとか手児のよひ坂もこゝをおきておもひよる所なし

なつかしきたこのよひ坂こひて来てこえぬもをしきたこのよひ坂

いまもこの峠に道はあれと大かたおやしらす子しらすの波うちきはをとほるなりけりそはおそろしきところにもあらねは

白波のかゝるみるめはたらちねのおやにも子にもからせてしかな

なき人さへにおもひ出られてなんこゝを過れはいよ〳〵見わたしよくてむかししのはるゝところ也

たこのうらゆ打出にけん昔まてはるかにみゆる不二のしは山

いほさきのこぬみのはま袖師のうらなとなつきしきところなりさてこよひ由井のとまり蒲原になりぬるはあすの道ち[上ノ十九]

かくてやま見んためにはこよなき幸ひなりとみなよろこふ
廿二日けふこそしたしくやまのすかた見んとよへよりむねとゝろくはかり悦ひをりしをあやにくに雨ふり出たれはたれも〳〵うちしほれてそ行なるふし川のほとり岩ふちといふところに茶店ありしはしいこへるほといさゝかそらはれて雲は山のなかはを横きりひきはへたるすそ野あさやかに見えいたゝきのほのかにほへるはさなからうす物につゝめる玉のことしうれしきまゝ原すくるほと

しらくものたゝよふ空に浮島の名をあらはせる不二の芝山
しはしありて又見えすなりぬ

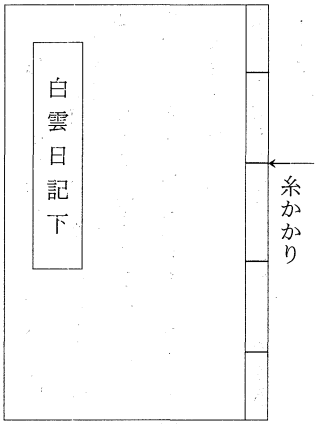
雨ころも山とゝもにも打かつきはれぬ心のうきしまかはら
おのかふるきうたに

ふ二のねのふゝきや空にましるらん夕立さむし浮しまかはら
こは題詠なれとけふのけしきによくかなへりと人々いふ

さて原の宿より大宮といふところにとまりていたゝきにのほりなんの心なりしを空のけしきはさらなりたとひのほり得たりとも雲風のこゝろもたちまちに立かはり身をさくさむさなと老人は殊にこゝろすへきことにてよものなかめも目路のおよはぬ境なれはなにのこゝろゆくことかあらんこれよりあつまにくたりてすみた川に舟うかへ(上ノ廿)みやこ鳥とうかれなんこそこよなかるへけれなと人々のいさむるもわりなけれはやかてそなたさまへはものしけるなりさてよし原の本陣のあるし鈴木香峯といふはやく文人画の名きこゆれはあはんとしつれといさゝかこゝちわつらひてうち臥居るよしなれは書おきの画ともをのそみてみるにおしなみの手つきにあらすゆかしき翁なりけりれいのかへさにはかならすなとちきりおきぬとく原の宿につきてやとりをとるあめ猶はれやらす日も長けれは長歌つくりてなくさむ

するかなる不しのたかねはいひもえす名つけもしらにあやしくも妙なるやまかくらひやまみねなる人もちりひちにましれる人もあはと見てゆめそとたとりよの中のことうちわすれなる神のおとのみきゝてふくかせのめに見ぬ人は月くさのうつしゑ見つゝはつ春のあさ日見ることおむかしみいはふこゝろは古もいまもかはらすふるゆきのたゆることなくひさかたのあまつをとめもこのやまにそてをりかへしもろこしにありしをのこかこのやまにおいすしなすのくすりをしもとめにきつるふることはかの国人のくさ〳〵のふみにも見えついまの世のゑみしらとも、天のはらふりさけみつゝふたつなきたまとめつれは日のもとのしつめのみかは天のした国といふくにのたからともなれる山はもふしのたかねは

（裏空白）上ノ廿二



白雲日記　下

廿三日猶雨のこゝろつらけれはいと腹たゝしくて原をたつ

あやにくに晴ぬ雨哉天のはら神のはらさへかはりはてけん

雨つゝみせる駕籠のうちはねふりかちにて沼津三島なとゆめちになして過ぬ愛鷹山ほのかに見ゆ

雨をふくあしたかおろし受なから箱ねの道にかゝりける哉

山中の宿にしはしいこふ

箱根ちのこの山中の水うまやひるねにあかぬ所也けり

峠にかゝるほといよ〳〵北風吹しまきて馬もかこもほと〳〵

探風斎守保筆 印

富士の絵

（見ひらき）

谷底におちいりぬへけれは下部ともは声をあけてうち恨むめりけふのそらのさはかりたゝならぬはやかて三岳よりふりくるみそれにそありける

箱根路のすゝのしのはら風さえてみそれになりぬみな月のそら

泊りの本陣に来てきけはいにし十六日には高根真白になりしといふもちにけぬれはそのよふりけるといひしはまことなりけりといひあへりいまやゝ空はれて海こしにみるいたゝきかのこまたらになりて更にいふへきこともなくうつゝ

ならぬこゝちするに時鳥ふた声三こゑおとつれたりうのはなも今をさかりとさきにほひておほかた四月はかりのけしきなるもあやし

足引の山郭公うの花もみなときしらぬところなりけり

廿四日のあしたとく見出して

はこね山あくれは玉とあらはれて空にかゝやく峰のしら雪

大空に玉とかゝやく不二のねはきよき神代のちりやなりけん

あしの海のなきさによする白波の早くも秋の声たてつ也

せきをこゆれはほとなく権現の社也そのゆくての木間よりれいの海こしに見ゆるけしきことさらなりさてはる〳〵下りゆく坂ちのなかめあやしくたへなり

箱根山たなひく雲を貫きて神さひたてる峰のほこ杉

ちはやふる神のうみけん二子山おひたゝん世をおもひこそやれ

はこね坂ひたりみきりに落たきる声ものすこき谷川の水

畑といふことろも本陣ありてにきはひし所と見ゆるをちかころの賊徒とも小田原より官軍におはれてにけさるとてこのゆくての茶屋ともに火をはなちしよりかくあさましきさまにはなりしとそかへす〳〵もにくむへきしれものともなり湯本ははこね温泉七所のうちなりといふしはし立よりてものくひゆあみともしけり湯屋のきよらにしつらひたるさまいふはかりなし未時はかり小田原につく石橋山は駅のいりくちより一里はかり西にありといふ

廿五日のとまりは大磯なり小田原よりこゝまての海辺をこよろきのいそといふ

大磯も小いそもおなしなみ松のたちつゝきたる所なりけり

大しまの沖よりよする白波をこよろきの磯に出てこそみれ
　みやこ出ていまは廿日もこゆるきのいそくは旅の日なみ也けり
廿六日藤沢宿よりふたりみたりつれにて鎌倉の鶴か岡八幡宮にまうつ
　ふる郷とさとはあれても鶴か岡千世の跡こそさやけかりけれ
我きみのとほつみおやの御塚は社の左にあたりてちかき所也いそくみちなれはさるへき所々もえ見すふたゝひかへさにものして由井のはまゑのしまなとのこりなく見めくるへしとちきりおく
廿七日雨ふるこよひのとまりは川崎にてあすなん江戸にはつくへけれは人々とおなしまくらにむつかたりするもこよひかきりにて雲ゐのよそのわかれちたゝならぬこゝちそしける
廿八日けふも雨やます品川にしはしやすみておのれはひとりさきたちて田町の大坂屋にやとりをとるすへての人々は[下ノ四]姫路侯の館を宿陣としてみな同所にいたれり
廿九日空はれたれはかの本営にものせむとていてたちけるみちにてゆくりなく井上長秋にあへりかれはいにし夏のはしめ蝦夷の任にてものしけれはわかれける時おのれ
　今よりは雁のつかひをたのみつゝありやなしやをとふ外はなし
なとうちなけきしにけふしもこゝにめくりあへるは更にうつゝならぬこゝちしてかきりなくよろこひあへり先かれかやとりに立よりてことのよしをきくにかの地のとりあつかひに付て政府へうかふへきこと出来てものせし也といふさらは遠からぬほとにみやこへのほるへしとていよ〳〵よろこふけふはこれより西の丸へ出るといへはおのれもうちつれゆきてさるへき所々見めくりかへさには海江田盛時さそひいてゝ上野に行寺はのこらすやけうせて見るへきところもなししのはすの池の中島によき茶屋とものあるにしはしたちよりてさけくむついてにれいのあされことといへり

花はちす妹とかさしてあそふ日は柳さくらもしのはすの池

それより浅草のあたりまてめくりてすみた河の岸なる青柳といふ楼にあそふ遠くちかくひきしらふる声々すさまし
きまてなるそやかてこゝの国ふりにてめつらしくも身にしむめりわかき人々こゝをせとうたけうたふさかりにあるし
[下ノ五]
の嫗出来てこの宿の名によれる歌をといふに

旅人のこゝろをときてなひく也すたのわたりの青柳の糸

けふはみそき祓ひの日なれはみやこのことをもおもひいてゝ

おもひきや都はなれてみやこ鳥あそふ渚にみそきせんとは

かくてさかつきのなかれかきりなくなりてわかき人々よし原のくるはにあそはんとそゝのかすに

みやこ鳥ともにこかれて老か身もむかしをとことなりぬへき哉

七月朔日両国のはしもとなる二州楼に遊ふれいの興に入りて歌よみ席書なとこゝろにまかせてものしつ

きのふけふふたつの国の大はしをかけてもともに遊ひつるかな

我友もおもへはともにみやこ鳥うれしきせにもあそふけふ哉

雲水の友ならぬともさためなく行わかれてはめくりあひつゝ

この日猶くれのこりたれはおのれひとりわかれて秋園古香を訪ふこはます子といひしむかしともにみやこに遊ひてう
るはしくましはりし人なれは来しかたのことは更也みちのうへのものかたりともあかすものしてかつよろこひかつな
けきつゝ時をうつしぬ

二日故村田春路かをしへ子山辺文伯和久井某ふたりつれにて訪ひ来春路は春海のうま子なるを江戸風の歌をこのます
[下ノ六]
ひとりおもひ侍るむねありてふかくこゝろを用ひけりとかおとゝしの秋にかおのかかたへせうそこせしこともありし

をこそのとし身まかりしときくいと〳〵くちをしさてかのぬし生のきはみよみためし歌ともの中よりよきかきりをすこしにても世にのこさまほしけれはそれえらひてたまはらんにはなき人いかはかりかよろこひ侍らむあすにてもたつさへまゐるへしとせちにいふなるはしひてもいなみかたきわさなれはみやにてゆるゝかにものすへしとうけかひおきぬ

七日日からなれはたゝにやはあるへきとて又れいの二州楼に遊ふ小松観瀾大久保甲東海江田盛時井上長秋中井桜洲なと外にもこれかれましれり江戸第一の勝地なれは一入興に入てさかつきとり〳〵うたへるうたとも

初秋月　　観瀾

てる月の影なつかしく成にけりすたのあたりのあきの初風

知紀

すみた川また初秋の月なみになかはの秋もうかひけるかな

むさしのゝかきりしられぬ秋の宮いまよりみゆる月の影哉

天の河ほしのあふせにすみ初てうき秋見えぬ月のかけかな

名所旅

みやこ鳥ともに遊へは角田河なみのうきねものとけかりけり

送八田翁帰京　　甲東

嘗期後会杳無期　何料重逢共一扈

却恨墨江之上月　清光此夜照離思

一代風騒徳不孤　東遊千里主恩殊
墨江秋月蓬峰雪　収拾奚嚢幾解環

盛時

関東覇気漠然終　唯有弦歌存古風
偶然共咏墨江月　人在青楼秋宮中

桜洲

九日築地の小田原町に宿を易こは桜洲かやとれる家にてすまひよろしけれはかならすこなたにといふにまかせたるなりけふしもみやこのたよりありて福崎季連のもとより

ふ二の根のうへにか、やくことのはの玉のひかりをおもひこそやれ

十一日赤坂なる勝某を訪ふあひみしはけふはしめてなれとみちのうへにつきてかねて消息せしこともありけれはいたくよろこひてよろつねもころなり外に備中国人勝木某長崎なる何氏の二人来あひてかきりなきものかたりになれり

十二日日本橋のほとりなる下条なにかしを訪ふ古香か友にて歌よむ人なれはふたりつれにてものしけりいたくよろこひてれいの長物かたりになりぬこ、の号を超然楼といへれはそれかために一首をとあるに

しきしまの道のうへにはよの中の塵を出たるやとも有けり

といへは古香

不二のねを立越し君のきませるはこの高楼のほまれならすや

又この春のはしめのうたとて

大きみのおほよろこひのみけしきは霞雲井にあらはれにけり

十四日井上文雄を訪ふとしはおのれにひとつおとれりといへといとすこやかなり妻なる老人もいて、ねもころにいふうちつけなからおのかこたひの出たちしか〳〵のよしをかたりけれはいたくよろこへるけしきにてあるし

七十をいま七かへりかさねつゝいよ〳〵まれの人といはれよ

又ちかころよめりしとて

かはらやくけふりしらみて朝霞猶よをのこす牛島の里

かねてきゝ及ひしみさ子も出来てたさくとも書けるかなかに

我ふねはうき木ならねと角田川月のみやこにこくかとそ思ふ

さてかのかひかねはふしのねならんとの考又しほしりの説いかにととひ試るにふたつなからあるしのこゝろにおちたるさまなり　〔下ノ九〕

十五日朝とく山辺文伯天野尚賢訪へり尚賢も春路かをしへ子なりといふさてあかたゐの翁の持れし書籍ともすへて春海の家にのこされて春路まて三代伝へ来しをこのぬしなくなりしより家継へき人もなけれは山辺氏のかたへとり納めおきたりとてあまたの冊子とも目録そへてもて来たれり中には翁のあらはされし自筆の草稿共もありてそは世に二なき宝なるをけふしもまさしく手ふれて見るうれしさいふはかりなしあるか中にすくれて見ゆる真跡ともは摸写をもせまほしきまゝにしはらくかしてんやといへはやすきことゝてさしおきていにけりみやこよりとくかへしつかはすへし

十六日はれいの山辺氏にいさなはれてすみた河に遊ふさるはやかておのかやとりの前なるほり江より小舟に棹さしてつく田島のあたりをめくりてはる〳〵みをさかのほるたのしき蘇子の赤壁のあそひにもまさりぬへきこゝちしてひるはかりいま戸といふところの楼にのほりて酒くみあるは書画かきすさひなとすそれより名たゝる七草見にものす一かのひのうちなれとあるかきりの花ともいまをさかりとさきみたれたるをきよらなる家のうちよりなかめやりあるは庭　〔下ノ十〕

のくま〳〵ゆきめくりなとあかすめてはやすところなりけり

八千草にうつる心のひまなきに猶恋しきは都也けり

それより梅若か塚向島なといふあたりを見めくりて又ふねにのるこのつゝみさくらのなみ木かきりなく見えわたりてはることのにきはひおもひやるにもあまりありぬへし

すみた河つゝみの桜みや人のかさゝん春やまちわたるらん

こはこのころの世のありさまによりていへるなりくれわたるほと永代の大橋を過て川しりにいたれるほといさよひの月山のはならてさし出たり

むさしの海大江のみとに船うけて浪にいさよふ月を見しかな

おほかにこよひの月の名はやまのはいつるけしきをいへるならんにこよひしもかゝるところにてはしめてこの見るめをかることあやしきまてにおほゆ

十七日けふは古香中条田中某なととなひてれいの舟あそひせんのあらましせしをにはかに船のたよりありときこえけれは観瀾と共に横浜にわたるこゝのやとひろくきよらにて楼よりふしはるかにみえておもひの外になかめよし

よこはまのにこれる波も澄はかりてらすは不二のみ雪也なり

すへてこゝのさまに里より岡のうへかけてゑみしともの家なみたちつゝきて我国のさかひとも見えすそのにきはひはもろこしの上海にもをさ〳〵おとらすとなんいふ

十八日黒田清綱訪ひ来こはひんかしのみいくさにものせんとてはやくみやこをいてたちてこゝまて来りしをやまひにおかされてこゝろならすとゝまれるなりけりさてちかころふしのねのくもりかちなるを友なる鶴丸某かうちかこつをきゝてよめりしとてかたれるは

雲のうへに位さためてふしのねの見えぬや高きしるしなるらん

廿日みちのくのたよりありて磐木の城おちたるよしきこゆみつからなせるわさわひはいかゝはせん罪なき児女子ともの
うへをおもひやるにかなしともあはれともいはんかたなし

心なきいは木の山のやまひこもいかにかなしきこゑをたてけん

こたひ奥のたゝかひに味方手おひの人々こゝの病院にいりてこと国のくすしの手にかゝれかおほかる中に故田代清高
か末の子某いたくなやみくるしみけるかかれか兄なる稲まろかことし七回忌にあたれはとて追福のため一首よみてお
くり給はんには苔の下の悦ひはさらなりおのれあす死なんにもうらやすく侍らんといひおこせたり稲丸はおのかをし
へ子にてしたしくいひかはしけれはやかてかいつけておくりぬ

なき人もこゝろやすめよ大君の御代は昔の御世にかへりぬ

廿一日亜国の教師バラーといふものにあふこはさきつ日寺島陶蔵よりあないしおきつれはいたく悦へるさま也日本詞
もよくつかひよく聞とるものなれはさま〳〵のことひこゝろ見また西洋天文の説につきて我神典の古伝説日神のみ
いはれよりして代々の盛衰或はいまの代のかく成ぬることなと一わたり書とりて見せけれはその条々はあすなんまゐ
りて猶うかゝひすへしといへり

廿二日巳時ちきりたかへすバラー訪ひ来れりさて質問の条々は速かに解しかたきことゝもあれはのちにこたへせんと
て別にくさ〳〵の書とももて来ておくれりかくてさきつ日こなたより示しおきつる日神のみいはれのことやゝうけひ
きたるにや昨日本国へ便りありけれはかれか子ともの方へ消息してなんちら天日を拝するはなに故そ神あることをし
るや否やといひつかはしけるをかたるこゝろゆきておほゆ

廿三日石井良策かあないにて病院にものしけりおのれいさゝか膝のいたみありけれは米国医師スイドルといふものに

あひてうかゝはせけるにこは深きやまひにあらすもとよりすこやかなれはつねに薬をも用ゆるに及はさるよしをいへりこの日中村某をとふこれも奥にて手を負ひつれとはやいゆへきにいたりぬれは遠からぬほとにふたゝひかしこに趣くへきにつけてれいの一首をといふに

みいくさにたつとしきけはそへてやる心のこまもおくれさりけり

廿八日未時はかり船にのる桜洲は横浜の任にてものしつれはさきつ日江戸より帰り来てありけるかけふしもわかれをしみにみえ来て

羨君遊跡路已賒　豈識明朝達浪花
横港下居僅数日　満篷風月又天涯

とうたひてかれひとりこゝに長居せんことをうちなけくもうへなりけり

観瀾

なきわたる雁のなみたも別路のたもとにかゝるこゝちこそすれ

よもすから宇治の川風身にしめてともにきゝしやおもひいつらん

知紀

あすよりは都の不二をなかめつゝあつまの空を恋やわたらん

なとなくさめおくめりさておのれくたりける道に伊勢尾張のあたりより駿河の駅かけて相知れる人々に帰さにはかならすたちよりなんとちきりおきつれはいまころはけふかあすと待わたらんもあるへけれはかくこゝろならす引たかへしことのよしをことわりつかはすとて

雲水にたくふ身なれは定なき我ふるまひをとかめさらなん

さてこたひの船は官物をつみはこはるゝなれは英国人より借入になりてさるへきつかさ〳〵はさらなり紅毛印度亜国人まてのりくみてゆくなりけりれいの蒸気船にて名をアルビヲンといひ船将をアイランドといへり日に三度の食事もすへてかの国の手ふりにて鳥獣又魚くたものなとにて飯もなきにはあらねとバウトルなといふものをとりかけてくふなれはこゝろよくもあらす女ともはいたくわひあへりちかころは夷ともの中にやまと詞つかふものもあれはなにくれの物語ともしてなくさみけるほとにはるかに不二の山をのそみてさ計りの山外国にもありやと印度人に問へは高山はおほけれとかくはかりうるはしきはいつれの国にも絶てなしといふ　下ノ十五

こと国の人にほこりて不二のねをともに見るこそたのしかりけれ

紅毛人ガラタマといへるは医師なれは物もしり詞もなれたるさまなれはそこには英語もよくつかふかとある人のとひけるに英語ハ下戸デゴザルといへはみな人腹をかゝへてわたる又漢字をしるやとゝへはしらすといふおほかたかれらは我国の文字をのみしりて人の国の文字しれるはすくなしもとよりしらすとて恥るけしきもなし日本人は少しにても漢字しらぬはなくてしらぬを恥るもあれと却て我国字にはうとくてにはしらぬもあれとはつることもなきをかの国人とものわらふことなりとそさて伊豆の海にかゝるほとにや

観瀾

久かたの空のみとりにあらはれて波にうかへるふしの芝山

知紀

船のうへにたゝよふ不二の山みれば天の海ゆくこゝちこそすれ

廿九日終日おひ手さへそひぬれは舟は矢よりもはやけれと夜のふけゆくまゝに雨ふり出風のこゝろもあらひにあらひてかちとるものもてあますやうなれはましておほかたの人はみなものもえくはて死ぬはかりなやみくつかへりくる　下ノ十六

しみあへれはわりなく船をとゝめてあくるをまつほとこのうへにいかさまに風ふきあれていかなる国にかたゝよひなんとあやふまるるまゝに

大きみのおほみ宝のふねなれは波路まもらへわたつみの神

あかつきはかり蒸気をたつるおときこゆるに人々よみかへりよろこひあへることかきりなし今は雨もはれ風もなきなんとすれは部屋をはひ出てよへとまりしところをきけは紀の国の大島より数十里の沖なりとかさはまことにあやふき命なりけりといまさらに人々むねつふれておもふなりけりやう〳〵にあけはなるゝほとわかのうら玉つしまなとほの〳〵見ゆるやうなれとおほつかなし紀のみさきより直さまになにはつさしてものすへかりしを風猶あしけれは兵庫のこなた神戸といふところに碇をおろす時はまたはやけれと雨やまねは猶船にとまれり

さはかりのうきめしのきて来たれとも猶きゝわふる波の音かな

夜もすからむこ山おろし聞なへにこゝろにかゝるかもの川波

八月二日朝とく卸りて鋏屋のもとに行れいの人々はよへより来てあひやとりせり肥前の大隈某は長崎の判府事なるを船にてはうちとけてものもいはさりしをけふなんはしめてこのやとにてしたしくかたらふ外国のことにかゝりなからかのあた浪におほれし徒とはきよく立はなれてもとすゑわきまへよろつおほろけならぬものかたりともねもころなれはよろこひにたえすてとりあへす

ゑみし船つとふみなとのくま〳〵もさやかに見ゆる月の影哉

三日大坂へいたるけふは軍艦にていとはやけれはかた時のまに川尻につきぬこの船はちかころ外国より買ひとられしにてつねには官物運ふ料にそなへられしなりけり

みやこへといそく心に見る時はけふのはや船はやしともなし

こと国のたひよりかへる心ちしてうれしくむかふ日枝の遠山
ちかく見て過しきのふのおも影も波間にうかふきちの遠山
いつ見てもなつかしきかな住吉のあら〻松原あはちしまやま
未の半過るころ今橋のもとなる平野屋につきぬ
四日ひるはかり天満宮にまうつ大橋をわたりけるとき角田川をおもひ出て
山見えて家なみ清きなには河すたのわたりの下にやはたつ
六日ゆくりなく故熊谷直好か妻れう子にあふさるは此平野屋のあるしは翁かをしへ子なれはよろつの事ひきうけてとりあつかひものせしにてつまなる人もやかてこ〻の別宅にすまひしてありけれはけふしもおのかかたへみえ来てはしめてあひみれとおのか名はかねてき〻及ひしとてよそならすうちものかたらふさまなき人の上かけていとあはれにおほゆ翁の歌やなにやわすれかたみにのこされしものはなしやと問ひけれはあらはされし書ともの草稿なとあれとそはをしへ子とものあつかりになりて家にはた〻画像のみ残れりとてもて来てみせけりいたく老たるすかたなりうちつけにた〻ならぬこ〻ちするま〻に
なからへてかりにも君かとはませは椿の園はあれさらましを
岩国のにしきの川の名にたくふことはの花は世になかれつ〻
なとうちなけきぬ
八日きよく空はれぬれはとく船にてのほるゆく〳〵酒くみつ〻うたへる歌とも
船うけて淀の川せを行はかりこ〻ろのゆくはあらしとそおもふ
かつらきの高まの山はいつみても雲のか〻らぬ時なかりけり

わきもこかかつらきの山いこま山はなれぬ雲のねたくも有るかな

舟うけてよとの川せを秋行はひるさへ虫の声きこゆなり

日比の雨にいたく水まさりてさかまくなみおそろしきまてなれは船のあしはかゆかす橋本のあたりよりとくくれ初て 下ノ十九

月あらはれたり

くまもなくみちたるよとの河水に遠くなかるゝ月をこそみれ

八幡山松のあらしのこゑなから月をのせ行よとの川船

亥時はかり伏見につきてやとる

九日とくたちて竹田の原をゆく〳〵

なきわたる初かりかねを身にしめて竹田の原にけふはきにけり

かへり来てみやこの不二の山みれはたか影よりもなつかしきかな

立わかれ長くあはたの山松のかはらぬ宮を見るそうれしき

酔雨書

下ノ廿

こそのなつ師の君あつまにくたり給ひしにさはることありてえしたかひまゐらせさりしくちをしさのやるかたなさにせめて道すから拾ひ得給ひし真玉をたにとこひ奉りやりけれはこれみよとてみせ玉へる数々さなから櫃にをさめおかむもあたらしうほいなきわさなれは大田美観と相はかりてさくら木にのほせむとするにつけて巻の名をうかゝひきこ

えしにいかにも似あはしうものしてよとの給ひおこせたれはやかてはしめの歌の句をとりて白雲の日記となつけけるになむ

明治二巳のとしの春　尾張国なる

羽島春隆

江戸日本橋通一丁目　須原屋　茂兵衛
同　日本橋通二丁目　山城屋　佐兵衛
同　芝明神前　岡田屋　嘉　七
発　同　日本橋通二丁目　須原屋　新兵衛
同　浅草茅町二丁目　須原屋　伊　八
行　同　両国横山町三丁目　和泉屋　金左衛衛
大坂心斎橋通北久太郎町　河内屋　喜兵衛
書　同　心斎橋通安土町　河内屋　和　助
同　心斎橋通博労町　河内屋　茂兵衛
肆　同　心斎橋通安堂寺町　秋田屋　太右衛門
京都二条通衣の棚角　風　月　庄左衛門
同　麩屋町姉小路上ル　俵　屋　清兵衛
尾州名古屋本町通七丁目　永楽屋　東四郎

（裏　空　白）